民主香川

定価　月100円
発行所
民主香川社
高松市藤塚町
3丁目13－14
☎(087)834-7311

香川県原水協が記念講演会を開催

県原水協は11日、本庄豊立命館大学・京都橘大学教員で、歴史教育者協議会副委員長を招いた講演会を開き、約50名が参加しました。

講演は「平和行進創始者西本あつし～非暴力主義者の今日的意義」というテーマで行われました。

本庄氏は、「現代のイスラエルのガザ虐殺やウクライナ戦争や、台湾有事の想定など東アジアの軍事的緊張の中、自民党政治は、安倍政権から岸田政権までで、敵基地攻撃・反撃能力保有など軍事的大変革を行った」と指摘。「いまの戦争ではミサイルが進化し、原発に囲まれる日本では、武器で武器を抑え込むことが不可能になっている」と述べました。

戦中などの近現代史に触れ、「いまこそ非暴力・不服従の反戦・平和主義の運動が見直されるべきだ」として、平和行進の先駆者の西本氏の活動を紹介しました。

憲法記念日　三越前で街頭宣伝

平和憲法を生かす香川県民の会

高松市で3日、平和憲法を生かす香川県民の会は第・回総会と、記念講演会の後で、ピースウォークを行い、三越前で街頭宣伝を行いました。

リレートークで、たなべ健一日本共産党東部地区委員長は岸田首相が訪米し、国賓待遇を受けたのは、軍事費2倍化や集団的自衛権の行使容認、武器輸出の解禁などの長年米軍が日本に求めてきた、戦争をする国家づくりを前進させたからだと指摘。「軍事栄えて民滅ぶとの言葉があるが、日本は軍事費が増え、社会保障は削られ、保険料は上がるなど、国民を取り巻く状況はこの言葉のようになっている。日本国憲法を守り、戦争をする国家づくりをとめよの声を広げていきましょう」と強く訴えました。

そのほかに、杉村智子代表委員、十河浩二県憲法会議事務局長、豊田雅人平和労組会議議長、井角操新社会党県本部委員長、多田雄平社会民主党市議、植田真紀（みどり・香川）県議、岸真紀子立憲民主党参議院議員がリレートークをしました。

太鼓台

「わが大君に召されたる・・・いざ行けつわもの日本男児」と出征兵士の歌を大音量で右翼車両が憲法記念日に「占領憲法を変えよう」と宣伝をしていた。

私の祖父は「わが大君」に召されて（戦前の大日本国憲法では天皇が主権者で、宣戦や徴兵権限があった）中国大陸で戦死した。出征する前に結婚して一児を授かったが（私の父）その子に会うこともなく天国に召された。結婚していた女性は「まだ若いのだから他に嫁ぎ直しなさい」と曾祖父夫妻に言われて他に嫁ぎ直した。わが父は父親も母親も知らないまま育った。

大日本帝国はアジア各国に戦争被害をもたらし、国内でも多大な犠牲を国民に強いて戦争は終わった。戦後、侵略戦争の反省から今の日本国憲法に「国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は・・永久にこれを放棄する」「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない、国の交戦権は、これを認めない」と銘記するに至った。世界に誇るべき内容である。

その憲法を自民党や維新の会は「変えよう」と策動している。「国を守るためには自衛権は当然」などと言って国民をだましているが、その実態は米軍の指揮のもと自衛隊が国際紛争に介入する（日本を戦争に巻き込むこと）が最大の狙いである。

日本国憲法のこの大事な平和の精神を守り抜くことが今大事なことではなかろうか。

伏石事件の慰霊祭

高松市内で2日、香川の三大小作争議といわれる伏石事件の慰霊祭が行われました。日本共産党のかし昭二県議、地域の代表者や遺族など約20名が参列しました。

伏石事件は、1924年、高松の伏石町で小作料減額を地主に求める農民運動です。運動への弾圧が高まり、刑事事件に発展、24名が拘留され、窃盗罪で逮捕されたもの。当時の若林三郎日本農民組合県顧問弁護士含め、3人が自殺などで死亡しました。

かし氏は「今年で100年を迎える伏石事件の先人の運動に学び、地域の農業を守っていく」と述べました。

参加者からは「当時、小作の農民は一反（＝約990平方㍍）につき収穫した米の7～8割（約210kg）が小作料として地主にとられ、搾取される貧しく苦しい生活だったが、こういう運動が戦後の農地改革につながった」との声が出ました。

【お詫びと訂正】

前号5月12日号第4面上の地球の息吹⑤のQRコードが不鮮明だったことをお詫びし、訂正します。下記で地理院地図の自然災害伝承碑の情報がみれます。

讃岐の文学碑めぐり ⑯

「いのち短し　恋せよ乙女……」を作詞した　吉井　勇（一八八六～一九六〇）

文・写真　深沢　雨根

「ゴンドラの唄」（いのち短し　恋せよ乙女　あかき唇　褪せぬ間に　明日の月日は　ないものを…）で有名な吉井勇は、何回も讃岐を訪れて歌を詠んでおり、各地に歌碑が建てられている。

小豆島のマルキン記念館入口にある歌碑

まるきんと　いへる名はよし　濃むらさき　醤油の王者　これとたたへむ

満濃池に一九八四年に建立された歌碑

水ならで　慈悲のこころをたたえたり　大師の池はありがたきかな

市制五十周年で丸亀城に建てられた歌碑

人麿の　歌かしこしと　思ひつつ　海のかなたの　沙弥島を見る

金毘羅さん宝物館の奥の裏参道にも歌碑がある。

金刀比羅の　宮はかしこし　舟ひとが　流し初穂を　さゝくるもうへ

高松市仏生山の法然寺の鐘にも短歌が鋳込まれている。

この鐘の　ひひかふところ　大いなる　やはらきの世の　礎となれ

これらの歌は、いずれも讃岐の風物を称賛したもので、即興詩人としての吉井の本領が発揮されている。

吉井勇は東京市芝区高輪に生まれた。祖父は枢密顧問官、父は伯爵で貴族院議員になり、母は薩摩藩家老格の家柄であった。早大高等予科に入学して以降、与謝野鉄幹、北原白秋、木下杢太郎、石川啄木らと親交を結ぶ。『明星』や『スバル』に作品を発表し、耽美派の歌人として盛名を得る。明治の末から戦後まで約半世紀にわたって活躍した歌人で、生涯で二万首を超える歌を詠んだ。吉井勇のもっともよく知られている歌のひとつは、第一歌集『酒ほがひ』（一九一〇年）にある次の一首であろう。

君にちかふ　阿蘇の煙の　絶ゆるとも　萬葉集の歌　ほろぶとも

吉井勇は四国と深い関わりがあり、一九三四年から一九三七年にかけて土佐の山里・猪野々（現・香美市）に隠棲したことがある。物部川に臨む崖の上に「渓鬼荘」なる草庵（現在は国登録有形文化財）を結んだのである。

余談になるが、吉井勇は一九三六年（昭和十一）に琴平を訪れたとき、直筆の短冊を二円、色紙を四円で売ったという。当時の一円は、現在二千円以上の価値があるから、結構高価なものであった。

満濃池にある歌碑

こんぴら裏街道の歌碑

丸亀城の歌碑

金毘羅の句碑